

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (学 術)	氏名	NARAYAN PRASAD KHANAL
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
SUSTAINABILITY OF COMMUNITY-BASED RICE SEED PRODUCTION: A CASE STUDY IN THE TARAI REGION OF NEPAL			
論文審査担当者			
主 査	広島大学大学院国際協力研究科 教授	マハラジャン、ケシャブ・ラル	
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科 教授	金 子	慎 治
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科 准教授	川 村	健 介
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科 准教授	関	恒 樹
審査委員	放送大学教養学部 教授	河 合	明 宣
〔論文審査の要旨〕			
<p>農業開発・作物の増産において種苗の選定・改良の役割が重要でありながらも政府の品種改良・普及体制は必ずしも充分ではないネパールにおける集落レベルの農民的種苗生産の問題に着目した本論文の課題は適切である。そして、ネパールの穀物生産地帯であるタライ地域の三つの異なる条件下にある村を選定し多様な農民的種苗生産の持続性について現地実態調査による一次資料に基づく地域研究の視野に立った実証的モデル分析は高く評価できる。</p> <p>本論文は9章から構成され、序章では研究の背景と課題、第2章では先行研究のレビューを行い、第3章では貧困、食糧確保、生活、気候変動に関する先行研究を整理し、研究対象地域及び利用するデータ、現地調査の正当性を検証し、研究の分析枠組みが提示されている。第4章では、ネパールにおける米の品種改良及び農家におけるその普及の実態を明らかにし、改良品種利用における規定要因をモデル分析により明らかにし、マクロ政策の限界について言及されている。第5章では、種米生産農家における効率性についてモデル分析を行い、生産技術及び生産要素配分の限界性について明らかにし、農家の教育、普及体制の改善・充実の重要性について指摘されている。第6章では、土づくりを気候変動に対する一つの持続的対応策として位置づけを行い、環境(土壌)保全型持続的種苗生産の優位性については多変量プロビットモデル分析によって明らかにされている。第7章で種米生産組織の販売成績、組織的制度に言及し、地域固定型種苗生産・消費(地産地消)の可能性について模索し一つのビジネスモデルが提示されている。第8章では、以上を踏まえ、上記ビジネスモデルの成功要因について明らかにし、それを各章の分析結果と連携させ、通常のビジネスモデルと異なる地域特異的改良種苗利用体制のあるべき姿について言及されている。第9章では、以上の論議が要約され、学問的意義及び政策的含意についてまとめ結論が述べられている。</p> <p>本論文は、1) 近年ネパールにおける農業・穀物生産の動向にについて分析し、その停滞の主要因の一つは脆弱な種苗生産及び貧弱な普及体制であることを明らかにしたこと。2) 事例地域の種米生産における改良品種利用の低迷を受給の観点から分析したこと。3) 種米生産における農民による改良品種の利用について詳細に分析し、改良品種利用のリスクが影響していることを明らかにしたこと。4) そのような問題に対応するため、生産者は自ら米麦の品種改良に取り組み、低コスト、低リスクで品種改良を行い、自ら販売路を開拓し、持続性を確保すべく農民的努力及びその効率性の要因を明らかにしたこと。5) 環境(土壌)保全型持続的種苗生産の優位性については多変量プロビットモデル分析によって明らかにしたこと。6) 種苗生産組織の販売成績、組織的制度に言及し、地域固定型種苗生産・消費(地産地消)の可能性について模索したこと。7) 研究成果の一部は内外で査読付学術論文(8本)として、また一部は地域農林経済学会や三つの国際シンポジウム等において口頭発表されていること。9) これらの研究を踏まえ、同問題の理解を深め、改良品種生産に影響する要因及び需給バランスを体系的にとらえる独自の理論構築を模索していること等は高く評価された。</p> <p>以上の結果から、審査委員全員一致で本論文が博士(学術)に充分値すると判断し合格と判定した。</p>			